

特集にあたって

明智龍男

本増大号は、「精神医学」誌の3冊目の増大号です。ご記憶の方もおられるかもしれませんが、1冊目は「精神科診療のエビデンス—国内外の重要ガイドライン解説」、2冊目は「精神科クリニカル・パール—先達に学ぶ」でした。

今回の3冊目の増大号の企画を編集委員会で話し合っている際に、言い方は悪いのですが、買って得をしたなと思える書籍、要するに多くの皆さんに手にとっていただき5,000円以上払ってもよかったと思っていただける本にしたいですね、という話になりました。そういった話し合いの中で、今回の増大号の案が出てきました。したがって、本増大号はあまり精神科関係の雑誌では類をみない、なかなかチャレンジングな内容に仕上がっています。

精神科診療は、患者さん・ご家族や医療者との人と人との関係の中で育まれていきます。その関係性は、初回の出会い（面接）から始まり、場合によっては年余にわたるお付き合いになることも稀ではありません。その協働作業の中で実にさまざまなことが起こります。精神科診療では、薬物療法、精神療法のみならず、日々の診療におけるちょっとした工夫、一言、気遣いなどもとても重要です。もちろんエビデンスを踏まえた医療を提供することも当然大切です。ただ、困ったことにすべてのヒトは「ミス」をします。例外はありません。

私はサイコオンコロジーを専門としていま

すが、がん専門病院で診療にあたっていた若い頃の苦い思い出があります。進行がんの患者さんの診察の依頼があり、ベッドサイドにお邪魔した際に、「気持ちはいかがですか」と尋ねたところ、「精神科医に用などない」と言われ、その後どうしていいか分からなくなってしまったことがありました。その患者さんは、診察時にとても強い痛みがあり、それを病棟のスタッフに確認せずに訪室してしまったばかりに、患者さんに無用な負担をかけてしまったのです。

今回、精神科診療の中で、患者さんやご家族に対して良かれと思って提供する診療行為や何気なくかけてしまう一言、誤解、あるいは思いもよらない薬剤の副作用、必要な検査忘れなど、さまざまな落とし穴、つまりピットフォールを紹介いたしました。そして、次にその落とし穴に陥ることなく、患者さん、ご家族を診療しケアできるよう、事例を挙げて解説していただきました。

今でもちょっとしたことで、しまった！と思うことが多々あります。To Error Is Human. と言います。誰でもミスをしますし、人間はミスをする存在です。ミスをゼロにすることはできませんが、ミスから学ぶことはできます。私自身、がん患者さんの病室を訪れる前に、必ず担当看護師さんに病状を尋ねて訪室するようになりました。落とし穴やミスからこそ学ぶべき点が多いということをこの本で感じとっていただき、普段の診療に活かしていただけますと幸甚に存じます。

* 名古屋市立大学大学院医学研究科精神・認知・行動医学分野（☎ 467-8601 愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1）